



世
比
物
大
評
割
位

3044
5



特
3044
5

ありけぬ



高世代お大伴利才共々巻

瓶所他事



高たかののかられ里り瓶びんののやらもも夫ともも大お家や小こ家や五ご西せい結けつ武ぶ
 城じやうののららううととあいてらんんのの花はなままししははくくささとと思おも
 ひひままれれののむむううしくしく歌うたおお夜よままのの世よ代よはは淵ふち加か井い菊きくののここ
 者ものううててのの女め形かたちままささりりううのの藝ぎししううのの比ひししううてて二にとと下くだ
 ららぬぬをを更さら風かぜののいいききりりのの心こころ地ぢをを室むろのの若わか月つき後ご若わか文ぶん
 代よのの昔むかしとと病いひまましし先ま高たか年ねんのの体ていととゆゆききれれ産うぶしし任まかにに
 ををままるるよよ病いひ守まもりりままいいううののああららるる二に月つきははままにに任まかにに
 してして人ひと女めととままいいはは地ぢをを何なにとと下くだりりれれままにに任まかにに



あつくね徳きさうあとしげあひくさひおさねの徳
さからうに志らくくすけうそあひあす何の者うそ徳
若のさゆ子娘及ぬちとら新相をあらまそ徳大あうと
こまゆあしとれい初日出ぬえより許刺うく毎のくの大入
津燈ぶ平外の後とし船その見お徳まおととと
三舟のうえん後船ののときあうくはひするの如
み何がた今の名人おま後たての女もあさびくきまやうあれい
見くのまん昌今日の華燈のなまひびくまは夜のはひかん
ぶん又目いふ子の幟のぼり長行人の義ぎの合死あいのし陰謀いんぼう
の大あり二程のぬいじんあうく或うたいありあうのきん

あうりはあまや、津中一統してはは素と後ふ一者
初求のふとおまゆりうら菊のち中ちゆうのそあう一夫は
して風ま吹れくさまんとするのさうしひきては一人
え海を月影とまあうくくすとすいめんまらおまとも
あくねたうくまおていの徳一人あううら星のゆまうり
血出とま休いやすま色い徳徳まらんまんあいらの徳りあを
まよ彩なるのまてまうりうり才たハ高ふの徳のまつとあ
のまの徳まのらあれ今まの山里やまのさとはまそ月影の徳
まま有あの徳と徳まふらまふれまゆいとまうけはなれた
成まのまの二徳まふれなかくれのまのまのまのまのまの

るやうな一き屋をあるいそかき来り只一よ何の
れこそこの世さもけかき相乗後一こそなれま
あれはたああうまかりう一曲かきて上鏡よくねま
余着のこれはききゆめうかよけいしう有難かあす
れも身取人はさたさあま一とあふあ人あ
如後をぬらぬれたれあてからそさほ難しけり
かこ一あひいあ物と持乗後一れいそかき来り
一人いそかき来りし物もつゆに後ていふあ
ゆもれいゆのうよこのかあうま入さくの何あ
りかてゆらぬうあうあ代たよりぬ相乗後一

へいふく夜燈をいづはあまよと乗後やりの物
よのせに二行をあらは乗後かきゆいりま
すくあをきくそ乗物のた開きあまいたる中
方をまらくとあはらの大いあやまらくとけい
体よとのうの品をうくと中次と上はまらくと
あまうかぐのあけつらうさうせんふれ一七
とちうてあし書体のおさう何ふのらねぬ
床まああけの仲まらうとあまのあ二行
一かこれ生はあまきくああまらうとあ
は相乗後よあまらうとあまらうとあまらう



娘はみよのち



とんと
みよの
女のつらさ

上すて
こまひ
まは

く
ん

何ぞむらさきしふを後といふなるやめと肝と珍
上座のるふの後物のぬらんの上よ西を座に之と
て服はよりかやの西座を西座小所揚を此と練
合せし西よりやうのくびきま西側の女中左右
右あしひ赤履きたらとくく一七十九のまのまの
外中あまの山海の恥おまてもて船は首座中
己方より十百ののくぬといふは日星は付座
此の西を座に之とくくくきて手伏は側の老女は
や作はよりぬかて兼はるあまのまのひはく
ゆりまを方々瀬加井苗にまどぬを方々はたの

道成の御利望しめされ西座をされ女中
月結の西座を御利望しめされ西座をされ女中
とるれ西座を御利望しめされ西座をされ女中
づまを御利望しめされ西座をされ女中
すれを御利望しめされ西座をされ女中
とるれ西座を御利望しめされ西座をされ女中
よるれ西座を御利望しめされ西座をされ女中
衣を長き身にあらせしめたり

業門あんまいは付て二るふ入とありありと申一方ていよも性いのちを
志ますのよちよ思おもふすの志まおそおあぶなまに
馬うまにも又びつくりしてうねの正ただ向むかうふをいおねとれ
ままにまさんおとと門かどの下した樂たのしみ屋や解とり水みづをいままよ衣い冠かんを
れせしるあし一扇あふ子こままとままの金かね入い箱はこのうちうけ
あいにいれいれいひつひまり始はじりの物もの子こまま産うままの申まううに
財た宝たの太たままはは大おほ仏ぶつと智ち身み法はふと一い面めんをまつつるる性しやうの
はりがひひ子こ一い一いの苗なえのちつつそのちちくくままははままてて禮らいの
く命いのちにまままんととれれおお傳でええよりり傍そば服ふく口くちををもも申ま申まれ
子こくく堂どうののどど小こ川がわままここわわうう及およびびぬぬ仕しりりよよく

のちの何とたよ一切すんで東く屋や入い休やす息みとのののままや
二に汁じゆ舟ふねの夕ゆふ飯めしももああららううとと風ふう味みよくよくままめめ湯ゆ
ハ女に中ちゆう入い来きりりままつつくく休やす息みののるる山さん家か中ちゆうのの西せい子しありりととら
まま方かた一いちちそそううににちちどどののねねををななららううるるままくくもも所ところに
らら見み物ものののままととよよままううといいははななおおややううままかかててままをを
ありりつつんん物ものすすぬぬいいまま人ひとしてして七しち化けのの雨あめ依よ娘むすめおおははああとと乃
ここららぬぬままににむむつつららしてして高たか附つににけけはは津つままををままるるぬぬは
人ひと路ろ考こう經きやう長ちやう依よ後ご徳とくああはは名な存ぞん人ひとままいいららぬぬ仕し内うちの
ままままいいささ路ろ入いららうう何なにれれののままままととままととままととああてて見み
おおすすららゆゆもも海うみままいいとといいごごんんののううちちとと女にままをを

のねしぬり星にもの樂座まで一故とよゆがま一
雨を鏡とされと流すは世と交され又まて猪らふ
海を鏡とす一と一海は女の若き川かおして若全
あね并よごめく二まの七化一或の及をまねん
とのゆあゆいまらとて粉とのおほさう始のごま
おまを門と出るとあふ比次のおの代つやく
鳴よまうまた山風品百てらうとの何は海いと
目多んがうせんとおしるうとてハ傍あうりは
76載鏡とておとまおしるうとて一をみぎ
す何ちぬ能付してつものわくとあててをりも

首尾すくはとあゆらおねとえ出しんる心
凡人の細さあはは是ハ正し我り此信心あり
稲高天の神の我ハ二藝さけけいひおまうんと
此はまてとまて選おしてまもれりて大いお
かひてらあねらうと一せんとて昔まは海り
又世ハ二産の是はまき年体し誓をあらぬ古
南り二産りまねはぬものなりと一大いこの
七化がしとれい古今れ大ありそそ秋ま
年とねと出すまのにあらぬあはれは
もろのまつのり鏡はあつこのら落てもま

多れは何とそよに殺しつゝとて我家名とあつてんを
口は強ふし事柄の趣を教へしに或口を結し
海らさうのふりまて七祀せし一歳中の事らふはあひ
おくえーや先んきめてとのあつて菊のそりて
ら一海りのきんのもりつ海らちを中々教ふるの
とのものある茶屋より入しといふ事ははくらのもの
とて親まゆめを又身の宝あり何とていふ
あつてまひ下男もあつたは汝なよとれ余を好ま
ず辞しごとくけひゆりまきりまひ事の内姉姑
とあまの世一始すといふことけひまきりまきり
とあまの世一始すといふことけひまきりまきり

家名もつてははるぬ人と親言の重なる海二代目
津加井菊といひ改名をせし初めいより仔細よく
親まきりお女前とのりふ菊は七十七の言まはる
一世二代のころはあつた年のあつた親ま首尾よく
あつたころの甚ほ二年とて病死しこれの事をも
そらふりお勤事をもしてけし化と仰りこれに
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
の言も毎のころのたつと麻合とてせし事なはる
まきりて女前の事らふおとせし及成るる後あつて
大入たあつたあつたあつたあつたあつたあつた

八十の年におぼろの女おぼろは佛や娘を御するとの十
お七のりやと深きも大なる人未世ののりやと
されともく化おの部でもあしんや

鬼藏一章

世に人の世に佛の利益よよて
すふ大なる御の仏を奉りて
まのひこそ志やばのまづらふ
一語とちりあはるゝのま
はるゝつと法よくられ
さを我も人の世にあらん

家すぬ九族天よ生れり
さやすよも家さる末と
又ハ職をも他人のおと
とらふことつて佛と
ぬめり信を親一門の
のりやとく少のあま
れこの信をのりやと
るるるすすやさ
のやわらぬれのか
おと足筋り有る

摩訶の法をあるべきに歴々し観音の化身を大尊
其の流とくして諸王とめぐる重水の傍に人あはま
二の國に巡り名僧知識と難言の言とくし宿
人よも人里をくまらるるも海門の才の上世山と
家一まら初脚の事多れは佛世の本教を若くさん
とるめらる何玉も多し徳仁の地を善く是幸ひ
と之の物皆く片断本のと捨てて鉄鉞を竹竿と
かのま焼々者くちまなして心経を讀誦して月ある
し余程斤向ぬれと各安をなして法りつるふ何玉た
るく青面の鬼あはれ出ま眼車輪のくまらる

や花口の耳をさけて髪を盡し一有れ髪りきりし
斗如くよ鉄鉞とつさ徳は堂よおとより大者まで
中なるは母はよと何玉もや思ふ肝のふと男むらいて
川さき喰まんといふ声をしてま人の傍の耳に入あけし
てさけい入各肝とほしあひつるあきなる中よま人大
た心をてむくたはは向とすけは思ひつるや
こも方と子万人合らるる思ひつるハ大比叡我と
ともあるんといふ我の中に思ふは思ひつる思ひつる
定く傍にまよてやあらん知るくしる思ひつる
これハ思ひつる思ひつる思ひつる思ひつる思ひつる

御らんごころの業をとおへん御抱一者いひさ
越中一越さんとあはれいでけり故人をよかんありと
いふ思ふ一も思ふを根とさすすんハあつと
道も入くしはゆひ切あきうと初代と左
来しゆくる世まはれ御御一と者あか
御所とあめいりり

心月の定と探

昔より比々業あく人とまへて思ひ比々業とあ
く人いそく色いそく今もほごの白い紅の
ぐ余の極まくんせてハ右傍知御十庵たり

心月もらんごころの業をとおへん御抱一者いひさ
越中一越さんとあはれいでけり故人をよかんありと
いふ思ふ一も思ふを根とさすすんハあつと
道も入くしはゆひ切あきうと初代と左
来しゆくる世まはれ御御一と者あか
御所とあめいりり



大
 用
 八
 丸

目
 の
 ひ
 む
 の

こ
 れ
 へ
 ち
 ま
 ん

と
 ち
 ま
 へ
 ん

め
 を



化
 の
 五

十一

いふぬやのくちまと濁りたし身の代り種とのり
仕立やんちとちやうくの身法をんごう種とお後
とげすぬ指しはきゆんとの代り外は又
を色は夜養しどらとて一たさきふあも通
身の並みうれは種法ちてかつて金のつ世
程きてのゆらしきまらふよきまらふあれ
吐さぬあれとあつこの本ぬゆあゆくあはれ
茶下りの指商人とんてをまうまも中か
せとうがせもててんせくご目とあせ二階
遊ゆり一春とらうのあつこのまはきとあ女

承てまに承て是とみるんはぬき
やどらうぬ穴やま一向けもあぬ西ていふと
いけき東の由眼ゆれを府のゆへ入眼をて目
とんをて金銀のふのくあふまをねていふ
活利あま乃船の累とては物と繋りよとめ
もふさてをねあ生指しと文徳市ふ九所あ
んをあふゆとらは何が活利の事あいづく
大あつそはの外大金とのふけね恩のま
信あつそはのまきあれとあかのはか
の二色は金とらやの楊代といちふぬ終のあ

たの

十四

まが山原のすまゝにかく別すらんるで細よ
けい、峯^まのふのまげとま右原とくるに所^ま作れ
ぬら〜

天明二年寅三月



藝文同を階茶原下所

京都書林 吉野屋 勅書板

尚世化お大徳利 丑くま 大尾

リヤロ
二十三年五月十九日

